

# 『第7回がん医療従事者研修会』について

## 第7回がん医療従事者研修会

下関市立中央病院は平成18年8月に「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受けました。がん患者がその居住する地域に関わらず等しく継続的に全人的な質の高いがん医療を受けることができることを目的としています。  
今回は、**上部消化管スクリーニング検査**をテーマに下記のとおり開催いたしますので、ご多忙とは存じますがご参加の程よろしくお願いたします。



日時：平成21年9月11日（金）19時～20時

場所：東京第一ホテル下関 3階 桜の間

対象：下関市内の医師及びコメディカルスタッフ

◆ 研修会終了後、懇親会を予定しておりますので、こちらにも是非ご参加ください。

座長：副院長 松尾 憲一

「上部消化管スクリーニングの基本」

下関市立中央病院 消化器科医長 中島 稔

### 中島 稔先生の紹介：

平成5年九州大学第二内科（現病態機能内科学）に入局し、松山赤十字病院胃腸センター、新日鐵八幡記念病院などに勤務し、平成17年より下関市立中央病院に赴任。今回、本院ドックで行われている胃透視や上部消化管内視鏡の撮影方法、撮影時の注意点など基本的なことをご紹介いたします。

主催：下関市立中央病院（がん診療連携拠点病院推進協議会）

8月29・30日に開催されます『緩和ケア研修会』へたくさんのご応募いただき、誠にありがとうございました。

## 下関市立中央病院 第1回がん診療に携わる医師に対する 緩和ケア研修会

主催：下関市立中央病院  
下関市医師会  
日時：平成21年 8月29日（土）14:00～21:30  
8月30日（日）8:00～17:40  
場所：下関市立中央病院 2階 講堂  
〒750-8520 下関市向洋町一丁目13番1号  
定員：がん診療に携わる医師 24名（先着順）  
参加費：無料（但しお弁当・お茶代（2日分）として2,000円をいただきます）  
内容：講義、ワークショップ、ロールプレイ等  
（がん性疼痛等の身体症状および精神症状に対する緩和ケア、コミュニケーション）  
申込方法：申込用紙にもれなくご記入の上、以下のFAXまたはE-mail でお申し込みください。  
下関市立中央病院経営管理課庶務  
FAX: 083-224-3838  
E-mail: cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp  
申込締切：平成21年8月3日（月）

がん患者とその家族が早期から、切れ目なく緩和ケアを受けられるようになるために

※ すべてのプログラムを修了すると、厚生労働省健康局長より修了証が授与されます。

The PEACE project



2009年 Vol. (平成21年) **8/15 39**  
下関市立中央病院  
広報年報委員会  
〒750-8520 下関市向洋町 1-13-1  
TEL 083-231-4111  
FAX 083-224-3838

e-mail cokeieik@city.shimonoseki.yamaguchi.jp ホームページ http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/byoin/

目次	● 登録医の声	松田内科クリニック 松田 彰史先生	1	● 部門紹介	リハビリテーション科 城戸 秀彦 安部 裕美子	3
	● 診療科紹介	皮膚科 内田 寛	2	● お知らせ	第7回がん医療従事者研修会	4
	● ごあいさつ	事務局長 山田 祐作	2			

## 登録医の声

松田内科クリニック  
院長 松田 彰史先生



中央病院の諸先生方には、常日頃から大変お世話になっており、厚くお礼申し上げます。とくに病診連携室のみなさまには、対応の迅速性、的確性は市内でも群をぬいており日々感謝しております。

私は、昭和60年から国立下関病院消化器科(現在の関門医療センター)に勤務後、平成4年から彦島で父のあとを継承開業し現在に至っています。当院は、祖父が大正2年に開院し、95年になります。戦前には、市立高尾病院の分院が、彦島の本村の裏山にあり、赤痢やコレラの患者さんが多くいたため、ときには祖父が応援にいらっていたようで、幼心にコレラのはなしを聞いた覚えがあります。

さて自然災害に強い病院が、地域にはどうしても必要です。大豪雨による山口九州地方の災害は記憶に新しいところですが、これからは地球温暖化に伴う天変地異が頻発するのではないのでしょうか。関門医療センターは、長府海岸の台風で水没したことのある地域に移転してしまいました。済生会は、旧市内から遠くの山のふもとに移りました。旧市内、彦島の住民にとっては、二病院は不便になりました。中央病院は緑地に囲まれ、平坦で安全な地域にあります。この有利な点を活かし、自然災害に強く、いままですら以上に十分な機能をもった病院であってほしいものです。

自治体病院の抱える問題点は多く、全国的には崩壊寸前といわれております。とくにマンパワーは、常時不足状態のようですが、やはり医療サービスは、マンパワー次第ではないのでしょうか。マンパワーの充実が早急に望まれています。しかしこの問題は根が深く中々解決できそうにはありません。また開業医は、どうしても自己完結できない症例にでいますので、病診連携をお願いするしかないことも多々あります。また私自身もアラカン(今月で還暦)になり、体のあちこちに不具合がでてきました。中央病院の各科の先生方やナースのみなさまにご迷惑をおかけしているところで、今後ともよろしくお願いたします。

## 当直体制の変更について

当院の当直体制については、平成21年4月1日より救急当番日以外の平日は、**救急センター夜間当直医**が現状2名のところ、**1名のみ**となっております。平日当番日、土・日・祝日は従来どおりです。  
どうかご理解ご協力をお願いいたします。

患者様のご紹介・検査予約・お問い合わせについては

## 地域医療連携室

083 224-3860 083 224-3861  
FAX

## 編集後記

残暑お見舞い申し上げます。本号の表紙に松田内科クリニックの院長先生にご寄稿賜り感謝です。私事に恐縮ながら、記載されたK病院に私も松田先生と一緒したOBです。災害に強いとは、今秋に第2波が予想される新型インフルエンザにも通じます。一方ポスターのとおり、地域がん診療連携拠点病院としてがん医療従事者研修会もあり、ご参加願いたします。

吉田 順一



# 皮膚科

皮膚科 部長

内田 寛

診療では、帯状疱疹(特に三叉神経領域)や細菌感染症(丹毒、蜂窩織炎)を中心に入院加療しています。一人でできない手術が必要な疾患は残念ながら大学病院や他の病院へ紹介している状態です。勤務医としての幸せは、他科(特に内科)疾患に伴う稀な皮膚症状を診させていただけることです。また皮膚症状から内臓疾患が見つかることもあります。父親は、宇部で皮膚科開業医をしていますが私自身は勤務医の方があっていると思いますのでもう少し続けようと思っています。

今後とも宜しくお願いいたします。

平成20年度皮膚科患者数

外来実績	合計
延べ数	11,067人
新患	2,415人
一日平均	47.8人

登録医の先生方には患者さんのご紹介ありがとうございます。

私は、昭和56年に山口大学皮膚科に入局し、昭和60年旧北九州市立戸畑病院、その後山口大学医学部助手を経て平成元年4月に当院に赴任し、本年4月で在任20年となりました。この間ずっと一人医長として勤務しています。以前は、週に一度、山口大学から応援がありました。が医局員の減少のため約5年前から派遣中止されました。

赴任当時は、国立山口病院(現在市立豊浦病院)含めて市内5病院すべてに皮膚科医が常勤していましたが、現在、当院と下関厚生病院しか常勤医がいない状態となっています。将来を見据えて皮膚科専門医研修施設の認定を受けてきましたが平成22年4月からは皮膚科専門医が二人以上常勤していなければ指定解除すると学会からこの6月に通達がありました。皮膚科医も人気があるのは都会のようで地方の大学病院の医師不足のため医師確保のための方針と思われる。ますます勤務医にとって厳しい状態に陥っていくようです。

## 夏の ごあいさつ

事務局長 山田 祐作



登録医の先生方にはご健勝のこととお慶び申し上げます。

私は、7月1日付の人事異動により中央病院事務局に参りましたのでよろしくお願い申し上げます。

22年前、住宅課に所属しておりました時のことですが、その年に中央病院が現在地で診察を開始し、旧病院の跡地に公営住宅を建設することが決定いたしました。

ところが、病院棟の解体費が国庫補助対象外である為に資金不足となり事業が中断しておりました。当時米国で流行しておりました爆破解体工事をわが国で試験的に実施するという情報を掴んだ私は、国の所管省庁の担当部署に「下関市のある建物を試験的に解体して貰えないか」という唐突で不明瞭な内容を伝えたところ、偶然にも担当係長さんが

下関市の出身者であったこともあり、大変積極的に応援して頂いたのですが、最終的には立地環境面がネックとなり、わが国最初の解体工事の実現に至らなかったことが昨日のように思い出されます。

さて、ご周知のとおり、市立中央病院は急性期病院や地域がん診療連携拠点病院として、地域医療のほかに救急や特殊・高度医療などの政策医療を行っておりますが、今後も引き続き市民ニーズに応じた質の高い医療を提供し、健全な病院経営を行っていくために、病院が持っている経営課題を解決して病院機能の整備・充実を図ってまいりたい所存ですので、今後とも、先生方の尚一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

## 部門紹介

# リハビリテーション科

整形外科リハビリテーション科 医長

城戸 秀彦

リハビリテーション科 主任

安部 裕美子

当院のリハビリテーション科は、医師1名、理学療法士5名、助手1名のスタッフで診療を行っています。当科における基本診療は急性期リハビリテーションの役割機能を担っており、様々な疾患や外傷に伴って発生した障害のある患者様に対して発症早期または術後早期より積極的に機能回復、日常生活の自立、家庭職場復帰のためのトレーニングを実施しています。重点診療方針として、早期リハビリの充実・促進、患者様の満足度向上、チーム医療の充実を掲げて取り組んでいます。

急性期の患者様の状態は、日々、時間単位、分単位で変化しています。状態の変化を把握しながら、先の機能的な予後を検討し、患者様個々の背景に即したアプローチを展開できるよう努力しています。具体的な業務を挙げると、例えば西病棟に大腿骨頸部骨折の患者様が入院となれば、すぐさまベッドサイドにおもむきDVT予防、廃用症状予防に努め、術後翌日より座位、立位歩行訓練等、少しでも受傷前のADLを獲得できるようリハビリを計画しております。また、東病棟に脳梗塞の患者様が入院されたならば、発症後より積極的に離床、機能改善を図り、麻痺の改善、早期のADL再獲得を目標にリハビリを実施しています。さらに悪性疾患の患者様に運動障害、ADL制限があれば可能な限りの維持改善に努め、さらに活動意欲を高めQOLの維持、向上に取り組んでいます。

スタッフの人員数の関係で、まだ、年中無休の体制まではいきませんが、病棟看護師と連携をとり、協力を得ながら患者様の回復に最善を尽くしています。また、我々の理想とするレベルの高いリハビリを行うには高度なリハビリの知識、技術と症例の経験が必要であり、リハビリ科内での勉強会はもちろん、県内外での研修会にも積極的に参加しており、知識、技術の向上に努めています。

近年「リハビリテーション」という言葉は広く一般に認知されてきており、リハビリテーション科に対する期待や要望も膨らんできています。医療情勢も急性期、回復期、維持期と役割分担が進み、1施設完結ではなく効率的な地域連携型のリハビリへと

変わってきています。しかしながら効率化は重要ですが、それで果たして個々の患者様において最善の機能回復の期待に応えられているか疑問でもあります。外来で術後定期検診の患者様から日常生活動作等で具体的な質問を受けることがよくありますが、最近の医療現場では(患者様から伺う話によると)そのようなADLに対しておざなりなりハビリが多くなってきている印象をうけます。高齢化社会に伴い、高齢者も様々な生活活動を楽しむ御時世ですが、それにもかかわらず、巷では「術後は危ないから〇〇したらだめですよ。」「年だから〇〇はやめたほうが良いですよ」と可能と思われる動作でさえ、安直に禁止されているという話もよく聞きます。また、患者様本人で十分自立生活ができる見込みがあるにも関わらず、介護保険申請を安易に勧める話も耳にします。いずれもリハビリテーションの本質を見失いつつある事例だと思われる。このような情勢をふまえて、当科では患者様の要望に真摯に耳を傾け、単に、画一的な飾り言葉だけのリハビリではなく、患者様の実用的かつ具体的な本当の意味での生活の質向上を目指したリハビリの提供に努めていく所存であります。慢性疾患の術後の方は術前の活動性が術後も獲得できるように、外傷の術後の方は後遺症が残ったとしても少しでも術前の活動性に近づけるように、機能分化していく医療の中で、安全かつ患者様の満足度の高いリハビリ提供に努力していきたいと考えています。

御相談があれば当院リハビリテーション科もしくは整形外科へお気軽に御連絡ください。今後ともよろしく申し上げます。

